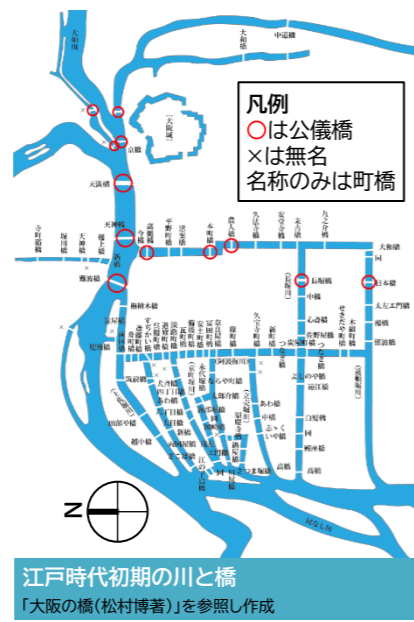


1. 大阪の橋の歴史

- 大阪の都市基盤は豊臣、江戸時代から形成されてきました。大坂夏の陣で市中は一時荒廃しますが、江戸時代には土地造成や水運を目的として、堀川が開削されました。そして、大阪の経済は交通の要である川を中心に発展し、天下の台所と呼ばれるほど、全国の物資が大坂に運び込まれました。
- 多くの堀川の開削を経て、大坂は「浪華八百八橋」と呼ばれるほど多くの橋が架けられました。近世の橋はほとんどが木造だったため、耐久性が弱く、荷車の通行制限や火事の監視が厳しく行なわれていました。橋の管理には、補修や架け替えを幕府が行った「公儀橋」と、有力な商人や近隣の町々が費用負担して架設や維持管理を行った「町橋」の2種類がありました。
- 近世の大坂には200近い橋がありましたが、公儀橋は12橋だけで、ほとんどが町橋でした。大坂町人の経済力がわかります。
- 町橋の多くは堀川開削と同時に架けられたため、堀川開削で造成した川沿いの地代に、橋の建設費用が含まれていました。その後の橋の維持費は、管理責任を負っている橋詰めの「橋本町(はしもとちょう)」と、費用の負担が義務付けられている橋筋の「橋掛り町(はしがかりちょう)」とで負担していました。負担は橋に近いところほど高く、離れるほど安くなるように割り当てられていたそうです。さらに、町内の各家は、間口の幅に応じて出資額が決められました。



2. 現代版の町橋制度づくり

橋の持つ問題・課題

【防犯・治安】

- 落書き、スケボー、騒音、放置自転車などの問題

【衛生面】

- ゴミ・廃棄物、喫煙などの問題



【交流・コミュニティ】

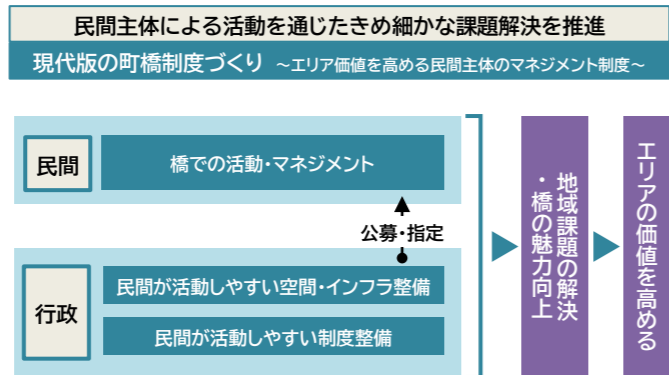
- 地域をつなぐ、人と人をつなぐ場でありながら、その場を活かしていない

【情報発信・ブランディング】

- 水都大阪の資源として場を活かしていない
- 高質な緑化等、質の高い空間を形成できていない

きめ細やかな課題への対応 ~民間主体の活動による課題解決

- 江戸時代の橋筋の町々が担ってきた「町橋」の仕組みやムーブメントを継承するため、民間が活動しやすい空間・インフラ整備や制度整備を進め、民間主体による橋での活動・マネジメントを推進します。
- これにより、行政だけでは実現できないきめ細やかな課題解決を推進し、橋や地域が抱える課題の解決や橋の魅力向上を図ることで、ひいてはエリア価値の向上につながることを期待されます。



3. 水都大阪ブリッジテラス 2030ビジョン

2030Vision

水・時・人が交わる、まちの拠点

めざすシーン

- 水都大阪のシンボルとなる拠点
- 地域やエリアが魅力に感じられる空間
- 地域活動を通じて新たな交流を生み出す場

シーンをつくる要素

要素1 担い手・公的なまちづくり団体

- 民間主体の担い手による、橋の魅力向上を図る利活用と高質な維持管理

要素2 空間デザイン・機能

- 多様な利活用を促進する橋上空間・施設整備

中之島ガーデンブリッジ

人と人をつなぐ未来の架け橋



水晶橋

水と時の流れに触れ、歴史と人を繋ぐ橋



錦橋

人と人、時をつなぐ橋



本町橋

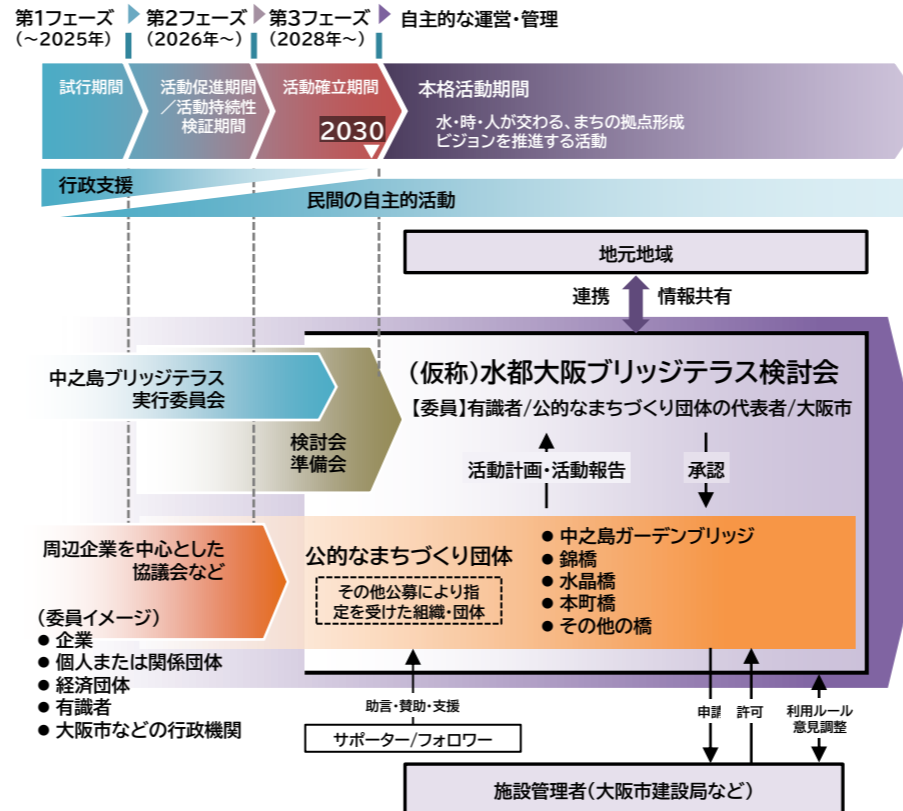
地域活動の場となる橋



4. ビジョン実現に向けた取組方針

推進体制~(仮称)水都大阪ブリッジテラス検討会の創設

- 本ビジョンに示すハード・ソフト施策を一体的に推進するためには、官民で共有できる新たなプラットフォームが必要となります。そこで、ビジョンを推進する体制として、現行の実行委員会を基盤とした(仮称)水都大阪ブリッジテラス検討会の創設をめざします。



水都大阪ブリッジテラス社会実験の実施

- 水都大阪ブリッジテラス社会実験では、民間主体による橋のマネジメント体制の構築をめざして、空間デザインや必要な機能、利活用のあり方、維持管理手法などについての検証を行っています。あわせて、安全性の確保や活動のしやすさといった観点から、民間活動の推進に向けた課題を抽出するとともに、担い手となりえる団体の参画意向・活動ニーズ、日常管理の実現可能性を確認することとしています。

基本的な検証内容



5. ロードマップ

第1フェーズ(～2025年)

試行期間

利活用ポテンシャルの検証

▼「水都大阪ブリッジテラス2030ビジョン」策定

第2フェーズ(2026年～)

活動促進期間／活動持続性検証期間

活動を活性化する仕組みの検証

▼「(仮称)橋上空間等のマネジメント基本方針」策定

第3フェーズ(2028年～)

活動確立期間

民間マネジメントの推進

2030

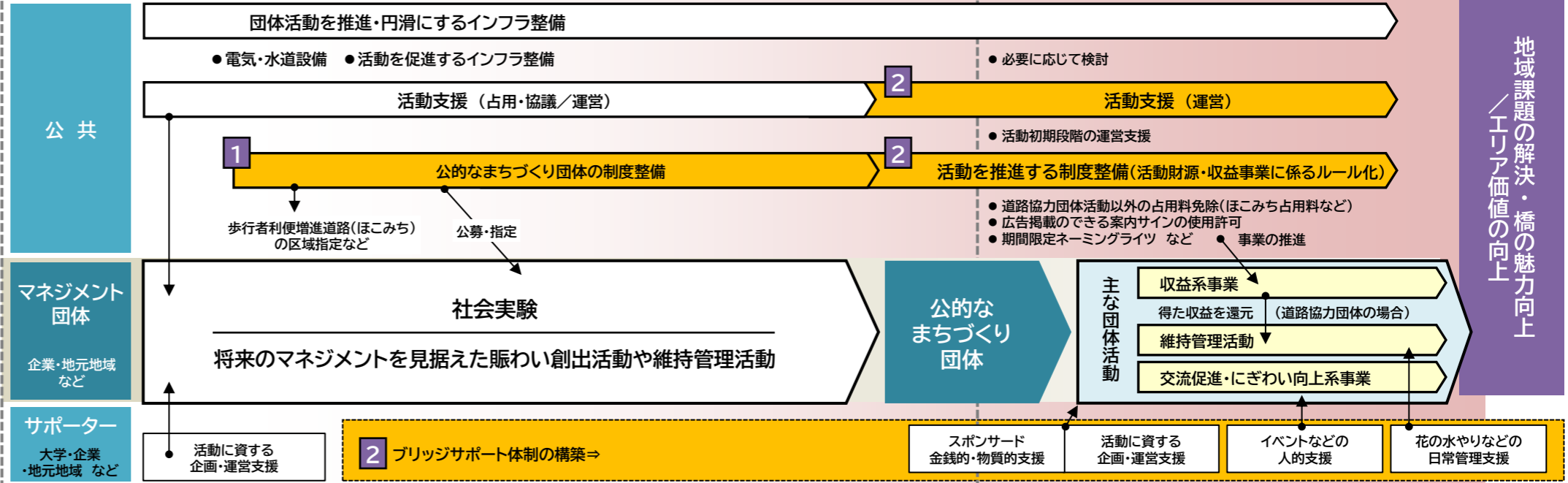
本格活動
(自主的な運営・管理)

地域課題の解決・橋の魅力向上
／エリア価値の向上

●現代版の町橋制度の創設

- 1 公的なまちづくり団体の指定
(道路占用許可等の特例制度の活用など)
- 2 ブリッジサポーター制度の創設
(活動を円滑に進める支援ルールの整備やサポート体制の構築)

- 本制度の特徴として、ブリッジサポーター制度を組み合わせています。これまでの社会実験で公的なまちづくり団体の指定にあたっては、担い手側の継続的な活動を担保するサポートが必要であることを確認しました。
- こうした経緯からフェーズを区分し、それぞれの状況に応じた官民それぞれの立場でのサポートを行うものとしています。



●橋別のロードマップ

第1フェーズ(～2025年)

第2フェーズ(2026年～)

中之島ガーデンブリッジ

錦橋

水晶橋

本町橋

共通項目

- ハード施策 [空間デザイン/機能]
- 滞留空間と通行空間の断面(幅員)の検証

● 堂島公園とのネットワークのあり方の検証

■ エリア活動を促進するインフラ設備の検証(電気・水道・倉庫)

■ 安全・安心・魅力の向上を図る橋上空間の検証

● ソフト施策[マネジメント]

- 事業ニーズの検証
- プレイヤーの発掘

■ ユニットベンチのレイアウト検証

■ 導流堤の利活用試行

■ 橋詰・橋下空間のあり方の検証

[第2フェーズの主な取組み] 活動区域の検証／多様な利活用に対応する橋上レイアウト

- 広幅員を活かし、イベントの内容やシチュエーションに応じた様々なレイアウトパターンは、主催者の意向やニーズに沿って自由に空間をカスタマイズが行えます。

[第2フェーズの主な取組み] 植栽帯の撤去と滞留空間のファニチャーの設置・検証

- 橋上に近隣の人々の交流の舞台とする多機能デッキなどを配することで、周辺企業が連携した多様な企画を通じて、交流を育みます。

[第2フェーズの主な取組み] 周辺エリアとの連続性を確保する動線・誘導内容の検証

- エリアをつなぐ魅力ある回遊動線や水上アクティビティによる他エリアとの相互移動など、周辺エリアとの連続性を確保するネットワークの形成を進めます。

[第2フェーズの主な取組み] 橋詰空間の検証・整備／飲食販売の定期化・定着化の検証

- 江戸時代、橋のたもとの詰め広場(橋詰)は交通や情報の拠点、コミュニティスペースとして活用されていました。このように橋と川、まちをつなぐ拠点として、憩い・交流空間の創出、情報発信、地域コミュニティの活性化を図る橋詰空間の形成を進めます。

共通項目

- ソフト施策[マネジメント]
- 周辺エリアの活動との連携促進、体制構築の可能性検証
- 活動を推進する制度の選定と活動区域の検証
- 持続的な活動とするための効果的なマネタイズ(活動財源)のあり方の検証
- 飲食販売の定期化・定着化の検証
- マネージャーを育成する勉強会などの開催や手続きの実践

■ 周辺開発との関係性を考慮した新たなハード施策の検証(第3フェーズ/2028年～)

- 橋上での活動を顕在化する情報板の設置
- 高欄・袖壁のライトアップ
- 水道設備の改良
- 倉庫機能の拡充
- 水道設備の改良
- 周辺エリアの活動との連携促進、体制構築の可能性検証
- 水上アクティビティの定期化・定着化の検証
- 可動式ユニットベンチの運営方法の検証
- 橋詰空間の検証・整備
- 歩道舗装の改修
- 案内誘導サインのあり方の検証(継続)
- ライトアップの本格実施